

いわてシニアネット 第63回文化サロン・講演会

盛岡城には不思議がいっぱい

平成27年10月22日(木) もりおか歴史文化館研修室

講師 神山 仁 先生 (日本城郭史学会委員)



第63回「文化サロン」チラシ

講師 神山 仁氏

プロフィール

盛岡市出身。川口印刷工業株式会社社員。ライフワークとして日本城郭史の調査に取り組む。盛岡城に関する資料調査をはじめ、主に元和一国一城令、江戸幕府の武家諸法度による城郭統制、江戸時代後期に造られた台場などに関する調査を行っている。共著は『日本名城絵図集成』(小学館)、『国別戦国大名城郭辞典』、『国別城郭・陣屋・要害・台場辞典』(東京堂出版)川口印刷工業が発行した探訪ブック『盛岡城』(監修 荻原さちこ)では編集・主筆を務める。

【主な社会活動、研究活動団体】

日本城郭史学会委員(盛岡支部長)、史跡盛岡城跡整備委員会委員、岩手の館研究会会員

南部氏の城づくりは「館屋敷型城郭」といわれる築城法が主流で、それは台地上にある平城と云う形式でした。そこに石垣はなく、居館の周りを深い堀と低い土塁がめぐる特色があります。そのような南部氏の城に、なぜ盛岡城のような城が生まれたのでしょうか。

盛岡城にまつわる不思議を解き明かす 神山仁先生の講演録(一部抜粋)です。



なぜ、南部氏は石垣の城を造れたのか

盛岡城は東北地方を代表する「石垣造りの城」です。仙台城にしても、弘前城においても、石垣は本丸の重要な部分や、本丸・二ノ丸・三ノ丸などの出入り口、城門が建つところ（虎口：こぐち）にしか築かれていません。これは城づくりの発想がまったく違うからです。石垣に対する「文化の違い」と言ってもいいでしょう。

同じ東北地方の城なのに、文化が違うということはあるだろう。そう言って叱ってくださる方もおられますが、築城主体が違うということをご理解いただければ、なるほどと、うなずかれることでしょう。

盛岡城は、奥羽再仕置のあと、豊臣政権が南部氏に築城を命じて出来た城郭です。

奥羽制覇を目論んでいる伊達政宗に対し、豊臣秀吉は南から蒲生氏郷、相馬義胤、佐竹義宣をもって備え、北からは南部信直をもって睨みをきかそうと考えたと思われます。南部家は甲斐源氏の一族で、南北朝時代の初期から奥羽地方において勢力を拡大し、最盛期には今日の青森県、岩手県・秋田県北部を支配下においた強大な勢力です。しかし国衆クラスの南部一族を統率する惣領家・三戸南部氏が、戦国大名化を遂げようとする大事な時期に、惣領（南部一族

の盟主)である三戸南部家は当主の人材に恵まれず、家中は分裂の道をたどりま
す。いつも問題視されるのが南部晴政という人物です。この殿さまが武田信玄
のような人であれば、また違った道もあったでしょうが、津軽に大浦為信、二
戸に九戸政実の勢力拡大を許し、惣領である三戸南部氏、その支持者である八
戸南部氏の立場を危うくしました。

こうした不安定要素を、織田信長や豊臣秀吉という「天下人」の権力を利用
して、安定要素に変えようと考えた人が南部信直です。彼は前田利家を通じて
秀吉に誼を通じ、南部家は秀吉に臣従するという道を選びました。当然、九戸
政実は反発したことでしょう。それは、ある歴史作家の方の表現をかりると「家
を売るのか」という、強い語調であったかも知れません。南部家は一族連合制、
それに周辺の国衆を加えたバランスのうえに領国を治めてきましたから、惣領
の判断とはいえ、一族にも計らずに大事な進路を決めるなど専横もはなはだし
い、ということでしょう。

しかし、このような判断ができるかできないか、それが英雄であることの条
件の一つでしょう。信直は秀吉の力は借りたけれども、家を守り、盛岡城を築
いて南部家十萬石の礎を築きました。



二の丸の高石垣と隅角部を支える算木積み

豊臣政権は、北奥羽を任せられる男として、南部信直の器量を見
込んでいたと思います。前田利家
は信直から秀吉への奏者として、
浅野長吉(後に長政)は奥羽支配の
監督者として、蒲生氏郷は伊達政
宗を押さえる北方の協力者として、
信直に期待するところが大きかつ
たと思います。

その証こそ盛岡城です。明確な史
料はありませんが、城の基本設計は浅野長吉が担当したといわれています。九
戸合戦後、蒲生氏郷は九戸城本丸を石垣造りの城に改修して信直に引き渡して
いますので、石垣普請を担当する石工(穴太衆:あのをしゅう)派遣に便宜を図れ
たと思います。残念ですが、これも確かな史料はありません。

すべて状況証拠の積み重ねですが、城の構造がいわゆる「織豊系城郭(しょく
ほうけいじょうかく)」の造りであり、関西地方の城郭に共通するものであること。
比較的築城早期のものとみられる石垣の技法が、穴太衆のやり方に似ているこ
となどから、そのような推定が成り立つのです。

しかし南部信直が頼みとする豊臣政権は、奥羽再仕置後10年足らずで破たん
しました。信直はほんとうに実直な方で、前田利家が健在なかぎり、利家一人

を頼りとし、権勢を手に入れようと画策する家康には儀礼的行為以外、ほとんど接近を図らなかつたようです。むしろ家康に急接近したのは嫡男・利直の方でした。もちろん、父・信直の命を受けてのことでしょうが…。

徳川氏の城には、徳川系城郭とでもいうべき城の造り方がありますが(実際には、このような表現をする城郭研究家はいません)。しかし盛岡城の構造プランには、その要素がほとんどありません。新しい徳川氏の時代を迎えても、古い時代のままの、ちょっと時代遅れになった観のある構造を取り入れています。石垣がその築造時期に適合する最新式技術で積まれているのにくらべ、特に虎口の造りが古いままなのです。

この点、城そのものにも、信直の実直さが表れているといえましょう。しかし残念ながら、この築城に信直の直接指揮はなかつたようです。盛岡築城は、あとを継いだ利直の仕事です。その点、利直も父君同様、実直な武将であったといえましょう。

すでにお分かりのように、盛岡城の築城には豊臣政権の意向が働いています。そこに築かれた石垣は当然、関西式なので、東北の城とは「文化が違う」ということになります。基本的に、東北の城は「土づくりの城」で、南部氏系城郭もまた、それはみごとな土造りの城でした。八戸根城をご覧になれば、分かると思います。

なぜ、御三階櫓が「天守櫓」と呼ばれるようになったのか

よく「盛岡にはお城がない。城跡があるだけだ」と言う人がいます。おかしな話だな、とは思いませんか。その方のいわんとするところは「盛岡には天守閣がない。石垣があるだけだ」という意味で、すでに天守が取り壊され、さみしいということをお話しているのでしょう。

盛岡城天守の歴史と構造については、今度、川口印刷工業が発行した『探訪ブック盛岡城』に詳しく書きましたので、ぜひ、そちらをご一読ください(2015年11月15日発売。県内主要書店で販売中)。コンピュータグラフィックによる再現にも挑戦していますので、どうぞお楽しみに。さて、天守というものは、お城どころか、まちのシンボルです。



熱心に講演を聴く参加者

「天守」という言葉は歴史用語になりますが、天守閣という言葉は、明治時代以降に定着したもので、江戸時代に使われた言葉ではありません。「閣」と称される建造物の平面形状は長方形だといわれます。天守の平面形状は、正方形のものが多く、そのような建物は「亭(ちん)」と呼ばれます。天守亭(てんしゅちん)では、なんか変ですね。史料には御天守、天守櫓、天守矢倉という表記がよく見られます。「天主」は安土城のみの表現といわれますが、高槻城や坂本城の大櫓にも「天主」という字が用いられているそうです。公家の日記に出てくるとのことです。

盛岡城の天守は、当初、「御三階櫓(ごさんかいやぐら)」と呼ばれていました。天守という、自家の武威を象徴する大櫓を建てることで徳川氏に警戒されるのではないか、10万石の自家には分不相応ではないか、そうした遠慮が働いたものだと思います。

しかし天保13年3月、南部利済の命により御三階櫓は「御天守」と尊称するよう家中に通達されました。南部家20万石、国持大名、北方警備を担う武威の象徴として「天守と呼ぶにふさわしい」と考えたのでしょう。

最近、天守の復元が各地で行われています。近いところでは白石城(宮城県)、白河小峰城(福島県)、新発田城(新潟県)で行われています。新発田城は御三階櫓と呼ばれていますが、天守と同じ存在感のものです。いずれも木造復元で、設計図(建地割図:たてちわりず)や古写真、正確な古絵図が残されているケースです。

昭和40年代を中心に全国で行われた天守復興は、鉄筋コンクリート造りでした。会津若松城天守、名古屋城天守、岡山城天守、広島城天守、備後福山城天守、いずれも外観が五重天守で堂々たるものです。このような天守のことを、お城研究の世界では「復興天守」とよびます。そのほか、歴史的根拠が全くない天守もあり、そういうものは「模擬天守」とよんで区別しています。

当時はそれでよかったです。しかし城地が国の史跡であり、確かな史料がない城の場合、文部省は「城の再建」を許しませんでした。盛岡城でも昭和29年に最初の天守再建運動が起こり、昭和41年には市民団体から四重天守の再建計画が示され論議をよびました。当時の市長さんが「岩山に造ったらいいだろう」と言ったそうで、その後、四重天守の再建計画は立ち消えになっています。その団体は、昭和48年に再度、史料を精査検討されたうえで「史実に忠実」な、三重天守の再建プランを示しました。盛岡の場合、一貫して「再建」と称していることが、他との違いです。

実は私が中学二年生のときで、中学生のくせに再建運動にのめりこみ、その団体の事務局長さんと親しくなりました。城郭の楽しみ方を教えてくださった恩人です。その方が、当時の再建プランで天守を作った盛岡城の模型が、今も

岩手県立博物館に展示されています。生前、その方は私にこう言い残しました。

「天守櫓の設計を間違っていた。君の手で、あの模型を直してほしい」と。

模型を直すことなど、私には簡単にはできませんが、『探訪ブック盛岡城』のCG画像や平金商店さんと川口印刷工業が共同開発したペーパークラフトは、その設計を直したもののなので、恩人の遺志を継ぐことはできたと思っています。もしかすると、あと数十年後、私も後輩の誰かに「君の手で直してほしい」とお願いすることがあるかも知れません。

いずれにしても、復元であろうが、復興・模擬天守であろうが、天守という建物は、城跡に立ってさえいればそのまちのシンボル、象徴になります。ですから、いいかげんなモノを造ることはできません。

私は今、盛岡市から委嘱されて史跡盛岡城跡整備委員会の委員を務めています。遠い将来、三重櫓再建を検討する計画があります。それが少しでも早まるよう、史料の発見に努めてまいります。



設計図を書いたのは、だれなのか

盛岡城築城のお手本になった城は、豊臣秀吉時代の大坂城ではないか。そう説かれるのは盛岡市教育委員会の室野秀文さんです。

「織豊系城郭」といわれるように、織田信長が築いた城や、豊臣大坂城を範とする城郭は全国にたくさんあります。盛岡城の場合、特に三ノ丸から本丸に至る経路や、本丸周辺部の造り、河川との位置関係が大坂城に酷似しているというお説です。

要点をまとめてみましょう。

- (1) 両城とも河川に向かって突出した丘陵または台地に立地しており、河川を背にして、大手を台地基部に開いている。
- (2) 盛岡城内曲輪は主要部が本丸、二ノ丸、三ノ丸に分かれ、大坂城本丸は詰之丸に表御殿の曲輪、米蔵の曲輪が連なり、主要曲輪を結んだ線は双方ともに「逆L字形」である。
- (3) 内部の機能は盛岡城が本丸に奥御殿、二ノ丸に表御殿、三ノ丸が勢溜と考えられる空間である。つまり曲輪の機能は、盛岡城の本丸は大坂城詰之丸に、二ノ丸は表御殿の曲輪に、三ノ丸は米蔵の曲輪に対比できる。
- (4) 盛岡城内曲輪と大坂城本丸の大きさを大まかに算出すると、盛岡城が約

67,780平方メートル、大坂城が約60,140平方メートルで盛岡城の方が少し大きい。

しかし盛岡城の大手に突出する下曲輪を除いた場合、面積は約61,760平方メートルとなり、大坂城本丸の面積に近い値となる。

(5) 両城とも主要曲輪を「逆L字形」に配置し、大坂城大手から入ると①勢溜の曲輪（盛岡城では三ノ丸）、②表御殿の曲輪（盛岡城では二ノ丸中之丸御殿）、③奥御殿（盛岡城では本丸）、④天守の曲輪、⑤山里曲輪という順序で入ることになる。

(6) 盛岡城内曲輪の構造は、豊臣期大坂城の構造を基本としながら、築城過程において新しい縄張の要素を取り入れながら造営された可能性が強い。

私もこの考え方に賛成しています。盛岡城の縄張り（設計者）は大坂城をよく知る浅野長吉が担当したという説についても、今のところ、反対を唱えるだけの史料がありません。盛岡城と大坂城をとりまく地形が似ていることもその一因でしょう。

しかし、大坂城について詳しい渡辺武先生（元大阪城天守閣主任）にこの話をしたところ、「ぜんぜん似ていない」という、それはもう、そっけない返事でした。

大阪人にとって、太閤さんが築いた大坂城は絶対的な存在ですから、この返事はあらかじめ予想していたことです。

南部信直が、三戸城以外の城をみてびっくりしたことといえば、蒲生氏郷が大改修した九戸城本丸でしょうか。本丸を覆い尽くすように、堀底から立ち上がる野面積みの石垣や、その上に連なる黒塀、聳え建つ矢倉、二階門の姿にも目を見張ったのではないのでしょうか。

しかし秀吉の命令による九州出陣の道中で遠望する東海筋の城郭のたたずまい、京洛の聚楽第、大坂城の壮麗さにはさぞかし驚いたことでしょう。そしてさらに山陽道の城、姫路城（秀吉築城）・岡山城（宇喜多氏築城）・広島城（毛利氏築城）にも遠くから目を凝らしたことでしょう。



本丸と二の丸を結ぶ廊下橋

九州に着いた信直は肥前名護屋城の近くに築かれた南部陣屋に入ります。今も呼子湾を見下ろす風光明媚な場所ですが、信直の目には巨大な名護屋城の天守が映っていたことでしょう。それは秀吉が朝鮮出兵のために根拠地として築いた大城郭です。

当時の城は「戦うための城」です。盛岡城にも籠城戦に備える工夫、敵の囲みを破る工夫が施されていました。しかし江戸時代という泰平の世の中で、戦闘施設はしだいに姿を変え、さらに「岩手公園」として整備される段階で、人の通行を妨げる遺構や危険なものが取り壊され、戦う城としての貴重な遺構が失われました。

段差が多い公園内の昇降を楽にしようと、石垣を斜めに昇る大きな石段が取り付けられました。こんなものが戦国時代にあったら敵が容易に攻め込めます。

今風に言いますと、城はバリアだらけ、公園はバリアフリー。相容れないものがそこにあることを忘れてはいけません。今の盛岡城には、戦う城としての姿はどこにもありません。

石垣が崩れたことはないというけど、ほんとうなの

盛岡城の石垣の積み方は大きく3パターンに分けられます。年代順に見ていくと、慶長期の野面積み、元和～寛永期の乱積み（布積崩積み）、延宝～元禄期以降の布積みとなります。盛岡城の場合、石垣修理記録と遺構が一致することから、比較的容易に年代観と技法観が一致します。全国的にみても、このような城は多くありません。城主の交代がなかったこと、「南部家文書」が保存・整理されていることが幸いしているのです。

まず慶長期の野面積みは、本丸東壁の石垣、二ノ丸東壁の石垣に見ることができます。本丸東壁の石垣は東北隅の隅角部の左側、丸みを帯び、苔むした自然石が古色を放っているのですぐに分かります。元和～寛永期の第3次築城期に、天守が建つ本丸東南隅から北に向かって石垣を積み直したとき、当時の石工棟梁がこの野面積みを解体せず、保存してくれました。きっと、先輩石工の仕事の素晴らしさに感嘆し、後世に伝えようと思ったのではないのでしょうか。二ノ丸東壁の野面積み、岩手公園広場の上、二ノ丸東南部に残っています。いわゆる「孕み」が進行し、崩壊を押さえるために「はばき石垣」が取り付けられていますが、その上に古い野面積みを見ることができます。

元和～寛永期の乱積みは、盛岡城を代表する石垣といっても過言ではありません。三角形や長方形、楕円形など、それはもう不整形な石を不規則に積み上げています。一見乱雑な積み方ですが、石と石のコンビネーションがよく、およそ400年近くの歳月が経っても崩れずにいます。本丸南壁や東壁南半、本丸腰曲輪や三ノ丸南壁・東壁・西壁に現存します。盛岡城内でいちばん多い積み方ですが、本丸北壁北東隅、北西隅、本丸腰曲輪南壁、二ノ丸南壁の石垣は昭和～平成の大修理で積み直されました。しかし石の欠損による新補石材はほん

の数個体で、ほぼ昔のとおりに復元、積み直されています。これも全国的に稀少な事例で、多くの城の場合、半分以上の石材が新補石材と交換されています。この積み方では、割り石を用います。石と石の不揃いな接合部をゲンノウとノミで叩いて（打って）加工することから、打ちこみはぎ（接ぎ）石垣とも呼ばれます。石垣を安定させるために、大小の積み石の間には間詰め石・小飼石（まづめいし・こばみいし）がはめ込まれています。見た目から乱積み、乱層積み、布積崩し積みと呼ばれます。

延宝～元禄期以降の布積みは、積み石の横方向に目地が通る積み方です。この



菜園側から本丸腰曲輪に上る坂道

石垣では間詰め石・小飼石がはめ込まれないのが特徴です。レンガのような積み方といえればお分かりになると思います。菜園に面する二ノ丸西壁の高石垣や本丸腰曲輪西壁石垣、三ノ丸北壁の石垣、それに二ノ丸東壁に取り付く二つの「はばき石垣」にも見ることができるものです。この積み方では切り石を用い、ていねいに石の四方をノミで加工し

て、層状に積み上げることから成層積みともいいます。石の表面（つら）もノミで整形し平らに仕上げることから布積みと呼ばれるものです。このような切り石積みの石垣を切り込みはぎ（接ぎ）石垣といいますが、盛岡城の場合、厳密に言えば切り込みはぎの石垣は存在しません。切り込みはぎ石垣の典型的なものとしては仙台城本丸石垣、江戸城天守台石垣が有名です。

私たちは、盛岡城の石垣が崩れたことを見たことがありません。太平洋戦争の終わりごろ、榊山曲輪北側の石垣を取り外して防空壕を掘ったことがあります。その部分が昭和36年に崩落したことがあります。これは人為的なことで、例外的に扱いたいと思います。歴史的には、江戸時代の初めには何度か崩れたといいますが、たしかに記録はありません。記録上で確認される石垣崩落は、菜園から本丸腰曲輪に上る坂道の石垣で発生したことがあります。根石を斜面に沿うように積む必要があり、接地面も盛り土であったことから、崩落につながったものでしょう。三ノ丸北壁の石垣も崩落寸前だったという記録がありますが、崩れる前に積み直されています。

不來方城とは、盛岡城の別名ではなかったのか

日本の城の多くに「別名」「愛称」があります。城郭ガイドブックにも必ずその名が付されています。東北地方の城では、仙台城は青葉城、会津若松城は黒川城・若松城・鶴ヶ城、弘前城は高岡城、山形城には霞城という別名があります。

仙台城の別名・青葉城は城を築いた山が青葉山であることに因みます。会津若松城の黒川城は旧領主芦名・伊達氏時代からの城名・黒川城を蒲生氏郷が若松城と改名したもので、正しくは若松城が本名。郡名「会津」を冠して会津若松城といいますので、「南部盛岡城」みたいなものです。高岡城は弘前城の旧称です。山形城の別名・霞城は「かじょう」と読みます。敵に攻められたとき、たまたま濃い霞みにつつまれ、城の守りに役だったという伝説に因みます。そのほかにも姫路城は白鷺城、広島城は鯉城、熊本城は銀杏城などの別名があります。

盛岡城の別名としては「不来方城」「不来方南館」と称する城郭ガイドブックがあります。一般的には不来方城が定着していますが、盛岡市民のなかには「正しくは不来方城であって、盛岡城は行政的な呼称に過ぎないのだ」という人もいます。



左右の石垣は平成の大修理による積み直しだが忠実に復元されている

しかし私は、盛岡城は本名であるばかりか、盛岡城に別名はないものと考えています。不来方城という城は歴史的に存在せず、それは南部氏被官（または岩手郡の国衆）福士氏（地名を名字とする不来方氏）の居館・不来方館が歴史的に正しい存在であったからです。奥羽再仕置のあと、浅野長吉は南部信直に対して、不来方館の場所に城を

築き居城とするよう指示したといます。信直はその命に従い、福士氏から居館を召し上げ、そこに大規模な居城を築いたのです。

福士氏の居館・不来方館と、南部氏の居城・盛岡城とでは、歴史的立場・役割、城としての機能がまったく異なります。城の前身となった館という見方もありますが、大名である南部氏が、家来の居館の名称を引き継ぐなどということはありえず、したがって「不来方城」を城の別名とすることは妥当でないと考えます。

盛岡城が「東北三名城」でいいのか。弘前城、仙台城が可愛そうだ

日本人はランキングが大好きです。お城の世界でも、「日本三大名城」とは熊本城・名古屋城・姫路城（諸説あり）、「日本三大平山城」とは津山城・姫路城・伊予松山城、「日本三大水城」とは讃岐高松城・今治城・中津城などと格付けされています。

「東北三名城」という格付けもあります。私が中学生のころ、当時、新たに盛岡市が岩手公園入り口に設置した案内板には「盛岡城の石垣の壮大さは、会津若松城・白河城とともに東北三名城と称されている」という趣旨の記述がありました。この一文を読み、たいへん感激したことが昨日のように思い出されます。しかし高校生になって、福島県白河市を訪ねたときも、会津若松市を訪



三の丸から本丸を望む

れたときでも、城址公園入り口の解説板に、「東北三名城」という言葉は書いてありませんでした。

盛岡に帰り、歴史家の方々にお聞きしたところ、「それはナハン、盛岡人の作り話だべ」というではありませんか。

失意のうちにすごした20年後、ある本に出会いました。それは日本城郭史学会の生みの親、大類伸博士の著書『歴史講座 城郭之研

究』（日本学術普及会 大正4年11月23日発行）でした。大類先生とは面識を得ることはできませんでしたが、日本城郭史学会で史料調査活動に取り組む私はその“孫弟子”の一人です。

その城郭史研究のパイオニア・大類伸博士が岩手公園開園直後の盛岡城を踏査。史上2冊目の「お城の本」で盛岡城の評価を行っているのです。その文章を抜粋、引用させていただき、謎解きの最終章を閉じたいと思います。盛岡城の観光キャッチコピーとして使える「東北三名城」の由来がここにあります。

東北二大城郭の特色

仙台青葉城は安土、桃山の二城と等しく、主として防禦の価値を地形に託したものである。従って其の郭の配置の不規則な点は、戦国城塞の山城に似たと云って宜しい。之に反し会津鶴ヶ城が整然たる築城の形式を具備して居ることが、殆ど後世軍学者の説く所と符節を合わせた様な点があるのは、昇平の邸宅的築城に属するものと云うべきである。即ち一は重きを実戦の価値に於いたもので、従って其の築城法は奔放となり又不規則ともなる。又一は重きを形式に於いたもので、従って其の縄張りは緻密であり整然として居る。是が両城の大

に異なる点であって、又等しく東北の名城たる所以なのである。

此の外又白河、盛岡の如き東北の名城たるものであろうが仙台、会津に比すれば頗る遜色なきを得ない。蓋し京阪地方に於いて姫路、名古屋、大阪の三城が有して居る地位は東北地方に於いては必ずや雄大なる仙台城、整然たる会津城の二者でなければならぬと思う。

塁濠及び縄張り

次に城塁及び城濠に就いて注意すべきことは、東北の諸城郭に石塁を用いたものが少ないことであろう。**多くの内で全城に石塁を用いたものは会津鶴ヶ城、南部盛岡城及び白河城の三城のみである。**但し仙台城及び二本松城は半ば山城の性質を帯びたるものであるから、石塁を用いたことの少ないのは自然の結果であろう。其他の諸城に至っては多く土塁である。殊に秋田の如きは大規模の城郭でありながら全城石を用いなかったに至っては、異様の感がされるのである。

而して此等の間にあつて盛岡城が特に高大なる石塁を用いたのは注目の値がある。尚又其の石塁の傾斜の甚だしく緩であるのも、異彩を放つたものと云つて宜しい。

この文中、大類博士は東北地方において石垣を多用する城郭として盛岡城・会津鶴ヶ城・白河城を上げていますが、この評価が「東北三名城」の根拠と思われます。

しかしその上位には「東北二大城郭」（東北二大名城）があり、そのいずれにも会津鶴ヶ城の名が入っていることは見逃せません。



会場は70名の定員に対してほぼ満席

大類博士に「酷評」された東北の城造りが、この地方の城郭の「個性」として尊重されるようになるのは、実はつい最近のことなのです。（おわり）

会場となったもりおか歴史文化館研修室には定員ぎりぎりの70名の参加者が訪れ、関心の高さを伺わせていました。